# 始まりと終わりと文芸部の探し物

平和鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
始まりと終わりと文芸部の探し物

【Ｎコード】
Ｎ３１２８Ｌ

【作者名】
平和鳩

【あらすじ】
Ｓ〇Ｓ団とＳ〇Ｓの違いについての論文を発表した里山だったが、ひょんなことから頭にＴ〇ＤＤを埋め込まれ、過去に飛ばされちまった。
どうする俺！と思っていた矢先にとある刀鍛冶と遭遇し、そこから俺の運命は予想だにしない方向に！
俺は心臓に刻みつけられた自分の運命に立ち向かえるのだろうか！
（全部嘘）

## エピローグが書ける人って凄いと思う

「部員がどう考えても少なすぎだと思うのよね」
パイプいすに足を組みながら座っている部長は、憂えをおびた顔をして呟いている。
「部員は増えずに本ばかり増えていって、そのうちここは神原さんの部屋みたいになってしまうんじゃないかしら、なんていつも考えているのに一向に姿を現さない木々良々さんに腹を立てている私に対して何か思うことはないのかしら、里山君。部員が少ないのも、木々良々さんに会えないのも、私が美しすぎるのも、すべて里山君の所為だというのに」
一気にまくしたてた部長は、さぁツッコミを入れろよ、と目で俺に訴えてきているようだった。
なんかもう、いきなり面倒な人だなぁ。
「いきなりネタが多いです、部長！　そんなに一気にツッコミ入れれません」
「じゃあ、一つずつ捌いていって」
「化〇語ですかー、いいですねー、あれ。おもしろいですよね。ふふふ」
「偽〇語ネタのシカトとはいい度胸ね、里山君。爪はがすわよ」
「えぇ！　す、すいません。適当にツッコんですいません」
果てしなく土下座。これからは面倒でもちゃんとツッコミを入れようと誓った高一の春。
「本当にすまないと思ってるなら、……地獄の果てまでついてきてくれる？」
「ネタをどんどん増やさないでください！　そんな言葉を放つのは、最近存在感が出てきた修道女以外知りません！」
「ふふ、ちゃんとツッコミを入れれるようになったきたじゃない。それでこそＳ〇Ｓ団の一員よ」

「〇にする意味全くないでしょ、それ！　たしかにここは文芸部だけどそれは一切関係ありません！」
「残念、この〇に入るのは『S』よ」
「だからどうしたこの野郎！　それこそ全く関係ねぇよ！　死んだ世界での戦線なんかに俺は所属してません！」
　この人はネタ混ぜないと死ぬのか？　コンボが凄すぎる。
　一生このやりとりが終わらないような気がしてきたころ、やっと先輩は話を本題に戻してくれた。
「どう考えても部員が少なすぎると思うのよね」
　今日二度目のつぶやきに俺は素早く食いついた。ほっとくとまたネタに走りそうだったからな。
「そりゃ、部長が全く部員勧誘しないからでしょ」
「でも、何もしなくてもあなたは入ってくれたじゃない」
「それは……」
　口ごもる俺。俺の場合は決して部長が何もしなかったわけではないんだけれど……、本人に言うのは癪だからごまかしとこう。
「それは……この際関係ありません」
「あら、関係あるわよ。一人入ったら十人は入ると思えって言うじゃない」
「部員はゴキブリじゃねえ！　俺はゴキブリ並ってかこの野郎」
「まぁ、御器被りさんに失礼でしょ。里山君はゴキブリ未満よ」
「以下ですらない！！」
　うぅ、なんでいじめられてんの、俺？　何も悪いことしてないよね？
「とりあえず、今日の部活動は部員探しよ。里山君、今すぐゴキブリを探してきてちょうだい」
「意味がわかりません、部長！　部員はやっぱあんたにとってゴキブリ並の存在か！」
「並じゃないわ、未……」
「うるさいです！　これ以上俺を傷つけないでください！」

「……」
あれ？　冗談のつもりで言ったのにもしかして真に受けてるのか？
部長うつむいて真剣な顔してるし。意外とかわいいところもあるな。
「……何かのネタ？」
俺の地の文を返せ。
「ネタじゃありません。あなたとは違うんです」
「ふ～ん、そう」
まさかのゲンスルー……じゃなくてネタスルー。こういうネタには触れてくれないんだ……。
てか古すぎたか？
まぁ、いいや。どうせ俺がボケになることは一生ないんだろうな。
「このやりとりはもういいです。それで、部長も当然ついてきますよね？」
「何が？」
駄目だ、素でわからないという顔をしている。自分が言い出したのになんでこの人はすぐ忘れるのだろう。
「だから、部員勧誘ですよ」
ああ～そのことね、とのほほんとした顔で部長は納得顔をした。
さすがに思い出してくれたか。
「何故、私が行くの？」
「あなた部長ですよ！　そして言いだしっぺだろ！」
「無理よ。私人見知りだもの」
「マジですか」
いやいや、あんなに俺に対して饒舌なのにさすがにそれはないだろ。
「大マジよ。人見知りだからこそ、この部活に入ったんだし」
たしかに……部長が他の人としゃっべてるの見たことないかも。
普段はあんまり接点がないから気付かなかったけど、意外と本当

なのかも。
「てことで、私は人に声をかけれないので部活勧誘に行けません。里山君が部員を集めてくれないと私は友達ができません。大人しく私は本を読んでるので里山君は行ってきてください」
何故か棒読みだったけど珍しく部長は敬語でものを頼んできた。
本当に困ってるのかも。
「わかりました。俺が行ってくるんで部長はここにいてください」
「ふふ、ありが」
コンコンと誰かが部室の扉をノックした。
もしかして、入部希望者？
「はーい、今行きます」
扉を開けると、そこには一人の女性徒がいた。バッジからみて二年生か？
「あのー、美由紀って人こちらにいませんか？」
下級生の俺に対して敬語を使ってくれたことに少し感動しながら、
「ああ、部長なら奥にいますよ」
と言って、彼女を奥に通した。
ちなみに美由紀ってのは部長の名前。
「やっほー、美由紀。今日、宮の家で誕生会だからね。忘れてると思って言いに来たんだけど」
「私をなめないでよ、優。宮の誕生会のことならちゃんと覚えていたわ。まぁ、宮の家の場所を忘れちゃったけど、テヘ」
意味ないじゃーん、へへへ、となんか楽しそうにキャッキャ喋っている。
なんかおかしくね？
「じゃあね、美由紀。忘れちゃダメだぞ」
「わかりました、提督。一生この胸に刻みつけておきます！」
帰り際、優さんは、
「美由紀のことよろしくお願いしますね、後輩くん」

とウインクしながら去って行った。
かわいい先輩だなーと思ったけど今はどうでもいいや。
「部長☆」
名前を呼ばれた部長はビクッと震えた後、こちらを恐る恐る見てきた。
「里山君……、☆とかあまり使わないでくれる。☆なら散々橋の下で見てきたから」
「この状況でネタに走るな！！　どこが人見知りだ、このペテン師！！」
「私は人見知りよ。その証拠に優と喋るとき、ネタを使わなかったわ」
「それは人見知りじゃねえ！　伝わらないから自重しただけだろ！！」
もう許さねえ、意地でも部活勧誘につき合わせてやる！！
「部長、行きますよ」
そう言って、部長の襟首をつかみ、俺は部室の扉を開いた。
「あれ、私一応部長なんだけど、あれ、なんかおかしくない？　これ」
「黙りなさい」
「それは、部室の扉を閉めるときに使う言葉よ、里山君。団員の独断専行は許されないわよ」
はぁ、やれやれ。
「地の文でネタとは……成長したわね」

## エピローグが書ける人って凄いと思う（後書き）

ネタばっかでスイマセン。
ふふふ、書いてて楽しいです。
いつも思うんですけど化〇語は趣味で書いたレベルじゃないですよね。
あの先生は世間に公表するつもりはなかったとか書いてますけど、
そんなもったいないことはお天道様が許しても俺が許さねえ！
これわからない人には全くわからないだろうなー

## レフティモデルに目がないのは誰？

「録画したＡ〇ｇｅｌ　ｂｅａｔｓを見たいから帰るわ」
「嘘言わないでください、この後友達の家でお誕生会するんじゃないですか？」
「なら、お誕生会行くから帰るわ」
「『なら』ってどういうことですか！　絶対帰らせませんからね」
部員勧誘の為に部室から飛び出したのはいいのだが、部活動の時間帯に帰宅部の奴らが残ってるはずもなく、結局なんの成果もなく部室に戻ってきたら、案の定部長が、今日の活動は終わったから早く帰らせろと駄々をこね始めた。
正直、文芸部は新入部員を集める前に部長の変更を迅速に行うべきだ、と思ったが、そうなると自動的に部長には俺が就任するということになり、ただでさえ天上天下唯我独尊部長様のお相手で心が疲弊しているのにさらにそんな面倒くさい役職に就くのはまっぴらごめんこうむるので、下剋上を起こすのはやめておくことにした。
なんだかんだ言って、部長という役職はそれなりに面倒なものなのだ。
「もう、することなんて一つもないじゃない。何？　私がバニースーツを着て新入部員を勧誘するまで帰らないと？　里山君はそう言いたいの？　この変態さん」
「一言も言ってないじゃないですか、そんなこと！　別にしてもいいですけど、先生に何をしてるんだと問い詰められた時、絶対に俺の名前出さないで下さいよ」
「大丈夫。とある部員に無理やり強要させられた、とでも言っておくわ」
「部員は俺しかいないじゃないですか！」
くっ……、早く何か行動を起こさないとどんどんこの人のペースに乗せられてしまう。

何かないか？　何かないか？　う～ん、そうだ！
「じゃあ、勧誘のチラシ作って掲示板に貼りましょうよ。見てくれた人がもしかしたら入ってくれるかもしれませんよ」
「五月半ばから貼り始めても誰も入らないんじゃないかしら？　世の中そんなに甘く出来てないわよ」
「わかってるなら何故新入生が入ってきた時作らなかったんですか！」
「春アニメのチェックに忙しくて製作時間がなかったのよ」
「二回といわず週五で死ね！」
「残念だったわね、私は毎週週五で萌え死んでるわ。文〇さんの言う『二回死ね！！』なんて最高よね」
行動を起こしたところでこの人のペースは全く揺らがないことを改めて認識。
この人の動かし方を知っている人がいるならば、青狸の力でも借りてこちら側の世界に来てもらいたい。もしくは、遠〇の元妻の千〇が声を担当しているメロンパン好きなあの黄色いロボットの力を借りるのもよし。
メロンパン好きはツンデレボイスのフレイム〇イズだけではないということをここに力強く宣言する。
「私もここに宣言するわ。歪んだ恋の物語ということは静〇と……」
「何言うつもりだオイ！！　後、勝手に人の心を読まないでください！」
ああもう、話が脱線しまくりだよ！
勝手に俺が脱線したせいでもあるんだけどさ。
「仕方ないから私が話を戻してあげるわ。結局のところ、里山君はチラシを作って部員を増やしましょうって言いたいのよね？」
「え？　ああ、そんなところです」
「全く……部活動の時間は限られてるのだから無駄口叩かないでちょうだい」
……泣いていいよね？　俺泣いていいよね？

そんなこんなで、主張が二転三転し、俺をいじめるためだけに生まれたような部長と客観的に見て不憫と思われる俺はようやく部員勧誘のチラシを作り始めた。

「まずは、着ぐるみを買いに行きましょう、里山君」
「全くいりません、部長。ここはオリコン一位二位を独占した部活じゃありませんよ」
「あらそう、なら、本日の生徒会……じゃなくて文芸部終了」
「終わらせんな！　ネタ入れんな！　キメポーズをするな！」
「じゃあ、何を書けばいいのかしら？」
「文芸部のいい点とかじゃないですか？」
「お菓子完備、ジュース完備、いっしょにアニメについて熱く語りましょう！、とか？」
「文芸部じゃねえ！　それじゃ、アニメ研究会じゃないですか！」
「じゃあ、宇宙人、未来人……」
「しつこい！！」
「なら、これでどう？」
部長はその貧相な胸を精一杯張って自信満々に一枚の紙を見せてきた。
「『あなたの思ったこと感じたことを私たちと一緒に綴っていきませんか？』ですか。いいじゃないですか、これ」
「ふふふ、不能な里山君には私の力がやっぱり必要見たいね」
「せめて、無能と言ってください！　冊条様！」
「よろしい、そなたに『無能』の位を差し上げてしんぜよう」
オホホホと高笑いを始めた部長。
調子に乗るとすぐこれだ。

でも、そんな部長と一緒に部活動をするのが俺のささやかな楽しみであるのはこの人には秘密だ。
言ったら絶対調子に乗るからな。
俺がいったい何を考えているかなんて全く知らない部長は、
「よし、本日の文芸部終わちっ」
「く〇むかよ！」
いつも通り、楽しそうにパロディをしていた。

## レフティモデルに目がないのは誰？（後書き）

これからテスト週間に入るので一、二週間更新できません。スイマセン。

## 文芸部のお食事

「私、気付いたの……人の誕生会に行くとおいしいものが食べれるということに！！」

本日も視界良好、晴天快晴、文芸部はいつも通りの活動……つまり何もしない、いつも通りの部長……つまり支離滅裂の破天荒、いつも通りの俺……つまり不幸者。

何が言いたいのかというと、部長がまた訳わからんということなのだ。

「昨日、宮の誕生会に行ったらまさかのフォアグラよ！！　誕生会にフォアグラよ！！　生まれて初めてのフォアグラよ！！　処女フォアグラなのよ！！　わかる？　里山君」

処女フォアグラってなんだよ、と心の中でつぶやく。面倒なので口には出さない。

「はぁ、フォアグラ食べたんですね。よかったじゃないですか」

部長は「はぁ」と溜息をつき、

「よかったじゃないですか……って、リアクション薄いわ！！　フォアグラよ！　レバー界の王様よ！

それをそんな淡白なリアクションで済まそうだなんていい度胸ね、里山君。あなたの名前をたけのこの里きのこの山君に改名するわよ。いいの？　たけのこきのこ君」

「そんな明〇製菓にコビを売るような名前にしないでください、部長。それと、せめて『里』と『山』は入れてください！！　そんな山の幸をふんだんに盛り込んだ名前の奴いません！」

今日も部長は絶好調。何を言うにしても、絶対どこかに俺の悪口を盛り込んでくる。

フォアグラの話だろうがアニメの話だろうがそれは変わらない。

もう、一種の病気と思ってもらって差し支えないと思う。

そんな毒舌部長の今回の話はフォアグラについてのようだ。

俺はフォアグラなんて見たことなきゃ当然食べたこともないしがない一般高校生である。
だから、そんな未確認食物について盛大なリアクションを求められても無理なんです。
というかフォアグラに興味ないし。
「まぁいいわ、改名はやめてあげるとして……何かフォアグラクイーンの私に何か質問はないの？　ないの？　味とか、臭いとか、味とか、臭いとか」
なるほど、どうやら部長はフォアグラについていろいろしゃべりたいみたいだ。
おもしろい夢を見た後、このおもしろさを誰かに伝えたくなる気持ちと似たようなものだろうかと適当に考える。
今まで食べたことのない未知の味について、いろいろと語りたいのだろう、この人は。
ふぅ、しようがないからいろいろ質問してあげるか。質問しなきゃ不貞腐れるしな。
「じゃあ、シンプルに、どんな味だったんですか？」
なんか、味と臭いについて聞いて欲しそうだったしこの質問が妥当だろう。
部長は待ってましたと言わんばかりに顔を輝かせ俺の質問に食いついてきた。
「ふふ、フォアグラの味はね……おいしいのよ！！」
「は？」
いやいや、何を言ってるんだこの人は？　俺の質問は別においしいか不味いか聞いていたわけではないのだが、仕方ないもう一度質問するか。
「もう一度言いますよ。どんな味だったんですか？」
「何回言わせれば気が済むの？　だから、おいしい味って言ってるじゃない。おいしい味よ。おいしい味」
この人ボキャブラリ少ねぇ！！　質問しろって言っといてそれは

ないだろ！！　おいしい味ってなんだ？　気の利いたコメント言わなくていいから、せめて甘いとか苦いとか辛いとかそういう言葉で表現してくれ！
　くっ、逆にフォアグラの味が気になってきた。
　なんとかして、この人からその味を聞きだしたい！
「じゃあ、何の味に似てました？　他の食べ物に例えてみてくださいよ」
　この質問ならおおまかな味はわかるだろうとか考えてた俺は大甘だった。
「そうね～、何とも例えれないわね、あの味は。うーん、未知の味だったわとしか言いようがないわね」
　だから未知の味ってなんだよ！！　と叫びそうになるところを寸前のところで止める。
　もういい、この人から味を聞きだすのはどんな凄腕の刑事でも無理だろう。
　なら、せめて臭いだけでも聞きだしてやる！
「臭いは！　臭いはどうでしたか！」
　俺の剣幕に少しビビリながら部長は、
「臭いは……味噌の臭いがしたわね」
　味噌？　フォアグラって味噌の臭いなのか？
　にわかには信じがたい臭いであるが、臭いを嗅いだ本人が言うのだろうから間違いないのだろう、たぶん。
「フォアグラって味噌の臭いなんですか？　予想外すぎますよ、さすが部長です」
　やった、やっとこの人から明確な情報を聞きだした。、フォアグラは味噌の臭い……か。今度誰かに言ってみようかな。
「そうでしょ、さすがでしょ私。フォアグラって味噌に漬けこんでもあんなにおいしいなんて予想外だったわ。和風フォアグラよ、里山君も食べてみたいでしょ？」
「うわー、食べてみたいですーって、調味料じゃねえか！！　フォ

アグラの臭いが味噌じゃなくて味噌の臭いが味噌なだけじゃん！！」
もう、我慢の限界だ。結局何にも伝わってこねえ！！　この人なんで話したがってたんだよ！
部長はちょっとびっくりしたのか、顔をこわばらせて、
「どう？　フォアグラのこと気になってきた？」と言ってきた。
「ええ、逆にものすごい興味湧いてきましたよ。逆にね」
部長は、「なんで逆に？」と呟いていたが、
「それなら……パンパカパーン。里山君にプレゼントよ」
そう言って部長は自分のバッグをガサゴソ漁り、一つのタッパーを取り出した。
「なんすか、それ？」
「ふふ、開けてみて」
そう言われたので、開けてみると部室中にもわっと臭いが広がる。
「生物兵器？」
「殺すわよ」
うそうそ、冗談です、と言った後、改めてみてみるがよくわからない。白い塊に焦げ目が付いており、何故か味噌の臭いがする。
「もしかして……フォアグラ？」
「チュドーン、大正解よ」
いや、効果音違くね？　とか思ったけどそんなことはどうでもいい。
何故ここにフォアグラが？
「ふふ、部活の後輩にも食べさせてあげたいなーって大きな声で呟いたら宮のお母さんがくれたのよ、嬉しいでしょ？」
「嬉しいですけど……嫌な客ですね」
部長は、なんだとーと怒りながらも、その顔は終始笑顔のままだった。
「これ腐ってませんよね？」
「殺すわよ」
二回目の殺すわよを聞いたところで、改めて質問してみる。

「これ……俺に……ですか？」
「そうよ、いらないなら私が食べるけど」
部長が平然と言った言葉に、俺はとても感動してしまった。
部長からのプレゼントなんて初めてのことだったから、急にドギマギしてしまう。
この気持ちが気づかれるはとっても恥ずかしいので、ごまかすように「じゃあ、いただきます」と言ってフォアグラを口に運ぶ。
ゆっくりゆっくり噛みしめる。
「味、どう？　おいしい？」
部長がこちらの顔を見ながらそう聞いてくる。
「う～ん、俺内臓系苦手なんですよね」
そう言ったら、部長に「どバカ！！」と言われ、グーパンチをくらった。
まぁ、あんなことを言ったら普通怒るよな。
けど、本音を言うのがどうしようもなく恥ずかしかったんだ。
「おいしい」この四文字がどうしても口に出せなかった。
言ってしまったら本心が部長に伝わってしまいそうだったから、こんな部長が俺の本心を知ったらからかうに決まっている。
だから、せめて心の中で本心を呟いておこう。
「おいしかったですよ、部長。ありがとうございます」
いつか部長に気持ちをストレートにぶつけられるような人間になりたいなと、この時ばかりは願わずにはいられなかった。
そう、本心を全部……。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3128l/

始まりと終わりと文芸部の探し物

2010年10月9日17時49分発行